

魚沼市

ボランティア講演会

2019年5月28日（火）

魚沼市地域振興センター

地域を守る力

～災害に備えて～



自己紹介

名前：野村 卓也（のむら たくや）

所属：株式会社 野村防災

仕事内容：

- ・ 防災グッズの販売
- ・ 防災講演会
- ・ 防災教育のサポート
- ・ 自主防災活動のサポート
- ・ 災害支援活動 など



■ 近年の災害

北海道胆振地震、平成30年7月豪雨（各地）、大阪北部地震、台風21号水害（埼玉県・三重県）、九州北部豪雨、秋田県豪雨、鳥取県中部地震、糸魚川大火、台風10号（岩手・北海道水害）、熊本地震（水害もあり）、関東東北豪雨、広島土砂災害、新潟・福島豪雨、東日本大震災、中越沖地震、中越地震、阪神淡路大震災

同時多発＋広域

今日の内容

- 近年の災害の状況
- 過去の災害から見た地域の繋がりについて

公助の限界 72時間の壁

災害発生から72時間は自分たちで何とかすること。

「**自分の命は自分で守る！**」ことが重要。

イザという時に備え、「**日頃からお互いを助け合うこと**」
を意識し準備をしていた地域と、何もしていない地域では、
その時に大きな違いがでる。

過去の大地震

阪神・淡路大震災

中越大震災

東日本大震災

熊本地震

イザという時も助け合いが必要！！

魚沼市に救急車が何台あると思いますか？

魚沼市の人口（H31.3月現在）：35,886人

男性：17,585人

女性：18,301人

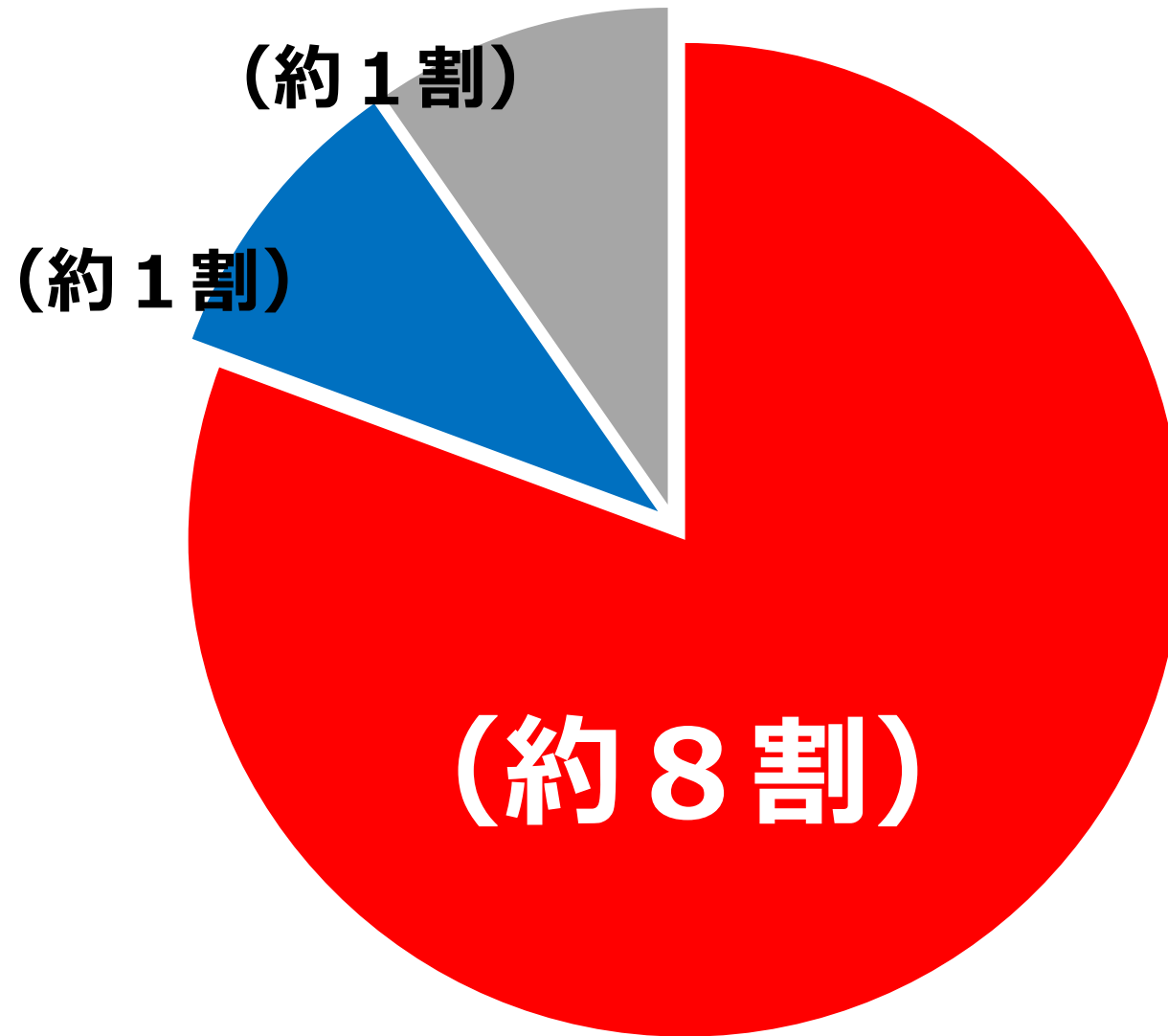
正解： 台

問題

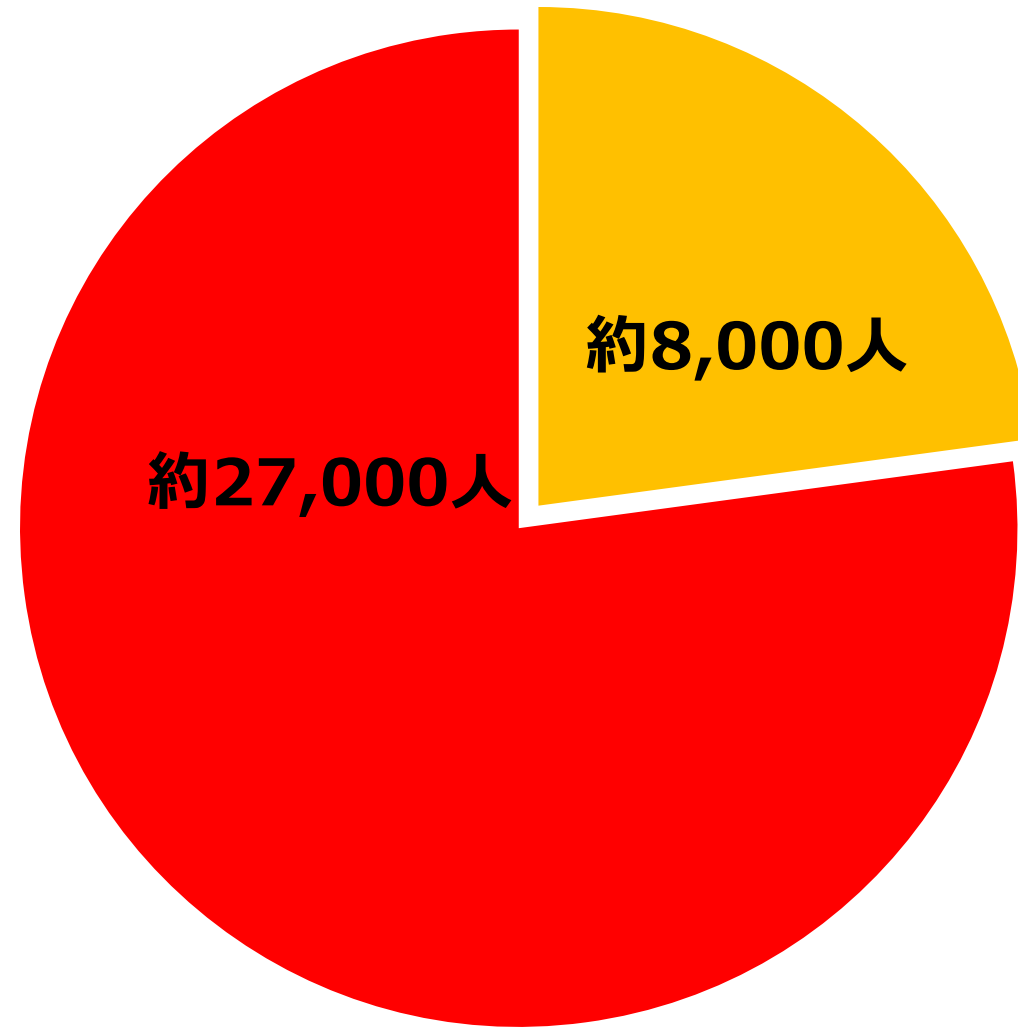
阪神淡路大震災で亡くなった方々の
一番の死亡原因は？

- ① 焼死・火傷
- ② 窒息・圧死
- ③ 震災関連死

阪神・淡路大震災の死者=6,434名



阪神淡路大震災での救出状況



ここで問題

**避難所は誰が
一番最初にくると
思いますか？**

大切畑地区 34棟中30棟が全壊

住家の下敷きになった9名を3時間以内に救助



なぜ、そのようなことができたか？

- 村職員数60名に対し防災担当者は1名
- 村には消防署はなく、出張所が1つあるだけ
- 当時11名職員と、1台のポンプ車、1台の救急車の体制
- 警察は大津警察署西原村駐在所があるのみ
- 24時間対応の病院はない

住民や行政の自助・共助
意識がUP

倒壊家屋救出訓練



平成15年度から隔年で実施している
発災対応型防災訓練

余震が続く中での救助活動は、二次災害を回避するため、屋根を開け建物の中に入る。



それが活かされた！！

大切畑地区人命救助（救出箇所）



布田地区 人命救助（救出箇所）



ポイント①

どんな方を巻き込むか??



ポイント②

地域（近所）に住んでいる方を知っていますか？

職業、資格、特技、趣味



西原村の河原小

炊き出し、救護…役割分担



避難所となった河原小体育館で朝食前、避難者に声をかける堀田直孝さん＝24日

「復興信じて」駆け回る

うちは、『待つだけの避難所』ではなか

避難所 住民共助で運営

住民が自主的に役割分担し、震災を乗り越えようとする避難所がある。西原村の300人以上が身を寄せる河原小。16日未明の本震直後から、村職員の堀田直孝さん54がリーダーを務め、炊き出し班や配膳班などを動かす。ただ、本震から1週間が過ぎ、自宅の片付けも1の、避難所運営の負担は重い。

【一面参照】

「これから力を合わせましょ。入を、任幹したのは堀田さんから呼び掛けた。2日の夕食は、肉じゃが。避難者が持参する、ヤギモ、支那産の豚肉、野菜、豆腐を調理した。本震直後、避難所運営を担ったのは、同校の調理師米田直孝さん54と長谷川智香さん54。大型の鍋2つを使い、慣れた手つきで300食を毎日作る。『避難所の女性が協力し、その想定が現実になった。看護

◆住民が自主的に役割分担し震災を乗り越えた避難所。

◆本格的な支援が来るまで、長年消防団に所属していた住民が、住民の得意分野を聞き取り、受付班、調理班、配膳班、見守り班などを設置

◆行政は罹災証明書の発行や本来の業務に追われてしまう。担当も1日で交代し中々引き継ぎもうまくいかないことがある。

1日、1日で状況が変化するので、避難所にいる方で運営をする必要がある。

◆住民通しの助け合いで困難を乗り越えることが大切

平時からできる防災活動のヒント

既存の行事を読みかえ、ちょっと加える。

例) お祭り

**テント設営、発電機の使用、いろいろな
地域住民の関与、etc...**

+

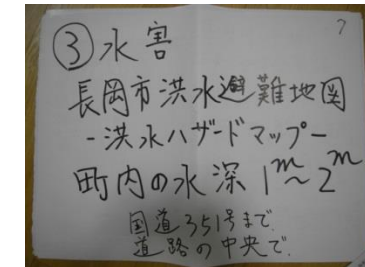
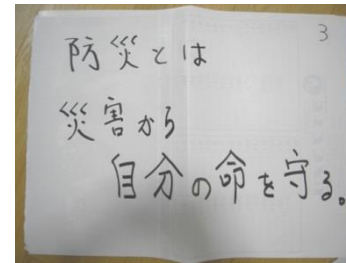
炊き出し、安否確認etc...



お祭りも立派な防災訓練

三ツ郷屋一丁目自主防災会

三ツ郷屋一丁目町内会は、設立1年目の新しい自主防災会ですが、町内に以前よりある町内会行事等を上手く活用して地域防災力の向上を図っています。



【左】三ツ郷屋一丁目における防災訓練の様子。町内会長さんが防災についての説明をしている。【上】防災訓練で防災の説明に使った紙。町内会長さんの自作だそうです。

8月に行われた防災訓練は、町内のお祭りと併せて行われ、200人を超える人たちが参加しました。

三ツ郷屋一丁目自主防災会



400人前のトン汁を炊き出しで作った他、町内の障害を持たれている方などにも参加してもらっているそうです。

また、三ツ郷屋一丁目では、この他にも町内の運動会の時にも炊き出しを行ったり、防犯のためのセーフティパトロールや環境美化のためのゴミ拾い、アメリ口防除なども町内の皆さんの協力を得て行っています。

町内で行っている古紙回収では、回収したお宅にはちり紙を、そして集めた町内会も多少の利益を上げられるようにと、様々な工夫を取り入れています。

三ツ郷屋一丁目では、こういった祭りなどの行事を通して、次第に顔見知りになり挨拶をする関係になる。そして、互いに知り合いになることで地域の防災力を高めているそうです。

新保町自主防災会

新保町は計1190世帯の大きな町内で、自主防災会では救急車や消防車が来るまでの初期対応が出来る体制を目指して活動を行っています。



炊き出し訓練の様子。この他にもAEDを用いた救急救命講習などの年3回の防災訓練の取組みを行っています。



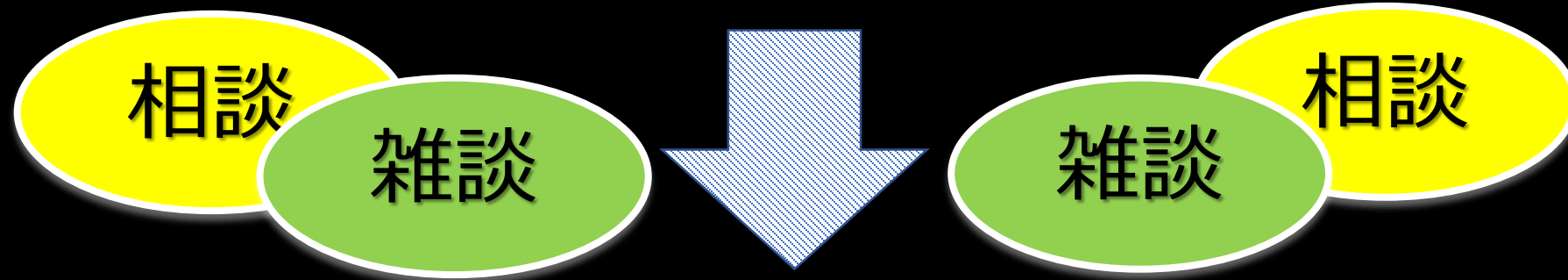
祭りでのテント設営の様子。お祭りのテント設営も訓練の一環として、防災委員の皆さんが中心となって行います。



新穂神社のお祭り。多くの人が集う場は、懇親を深める良い機会です。防災の第一歩はまず知り合いになることから。

新保自主防災会では、この他にも防災マップ作成や防災会議などを行い、地域の防災力向上に努めています。

出来ることから積み重ね。



顔の見える関係性を築く。

コミュニケーションプロセスが
「地域力」、「防災力」を
飛躍的に高める！

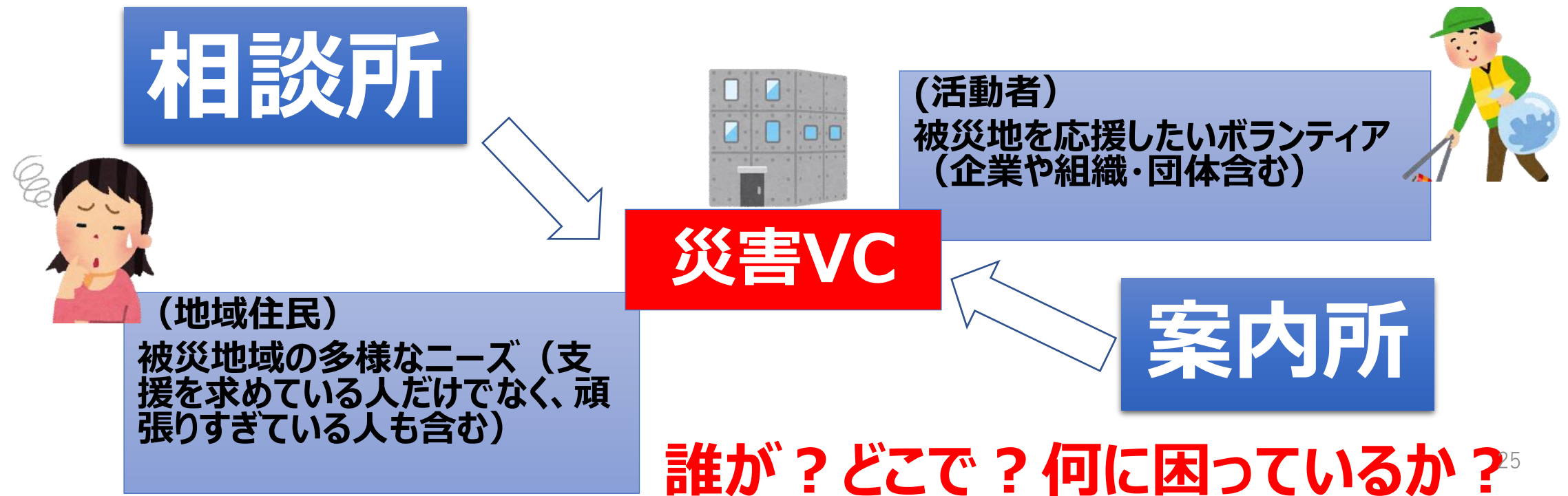
災害ボランティアセンター

近隣住民の助け合いが災害により機能しないところをボランティアの力を借りて、
復旧・復興に向けて被災者が自立・生活再
建することを目指す

災害ボランティアセンターの機能について

寄せられてくるニーズ（困り事）に対し、適切な解決策を検討するための**相談機能**。

単に相談窓口を開設するだけでなく、**自ら支援を要請すること**が**困難な住民**に対しても配慮は必要。



誰が？どこで？何に困っているか？²⁵

地域に合った災害
ボランティアセンターの
形が必要

支援依頼
困りごと

